

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：10107

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K17542

研究課題名(和文) おっくうと感じている地域高齢者の閉じこもり予防支援策の開発に関する縦断的研究

研究課題名(英文) A longitudinal study on the development of preventive measures to counter the withdrawal of the local elderly who feel troubled

研究代表者

水口 和香子 (Mizuguchi, Wakako)

旭川医科大学・医学部・助教

研究者番号：20781462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、介護保険未認定のおっくうと感じている75歳以上の地域高齢者を対象とした閉じこもりに至る前の予防支援策を開発することであった。郵送法で、対象者の社会活動状況、外出への思いや考え、外出頻度の現状とその1年後の状況について縦断調査を実施した。対象者を1年後におけるおっくうの状態の変化に応じ、おっくう継続群、おっくう移行群、おっくう改善群、非おっくう群の4群に分類し検討した結果、各群において外出に関する項目に有意な変化が認められ、その内容は各々異なる様相となった。閉じこもり予防支援では、外出の内容に特化した対象者の状況把握の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、おっくうと感じている高齢者の社会活動状況・外出についての思いや考え・外出頻度の現状とその1年後の変化について明らかにすることができた。この研究成果は、現在行われている閉じこもり予防支援の内容に付加することで、支援の一端を担うことができる可能性がある。今後、学会発表、論文投稿の予定であるが、比較的健康的な状態にある高齢者から介護予防支援を行うことができ、健康寿命延伸にむけた支援として寄与することができるものであると考える。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop preventive support measures to counter the withdrawal of local elderly aged 75 and over who feel troubled due to an absence of long-term care insurance certification. A longitudinal survey, distributed by post, was conducted to assess the subjects' social activities, thoughts and feelings regarding going out, and current frequency of going out, as well as the situation one year later. An examination of the subjects categorized into four groups (those who continued to feel troubled, those who came to feel troubled, those in whom the feeling improved, and those who didn't feel troubled) according to changes in their feelings after one year revealed significant changes in the items related to going out in each group, and the purpose for going out differed by group. It was suggested that it is necessary to grasp the situation regarding a subject's purpose in going out to develop support measures to prevent withdrawal.

研究分野：地域看護学

キーワード：おっくう 地域高齢者 外出 閉じこもり予防 縦断的研究

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高齢化の進展にともない、今後認知症に罹患する人の増加が予測され、認知症施策の推進が喫緊の課題となっている。認知機能の低下は閉じこもりとの関連性がある(新開ら,2005)といわれており、「閉じこもり予防・支援」が認知症予防・支援の一助になるといえる。「閉じこもり予防・支援」は、介護予防事業のうち訪問型介護予防事業に位置づけられている。しかし、2014年度の訪問型介護予防事業の実施数は、全国1741市町村中594市町村(34.1%)であり、介入方法についても模索している状況である。また、移動能力が高いにもかかわらず、日常生活行動範囲等の縮小や外出頻度が減少している状態の者には、将来「要介護状態」に至るハイリスク者が多く含まれていることから、予防的介入の対象として優先的にケアを行うべき(河野,2000;新開ら,2005)であるといわれている。

一方、高齢者の社会活動への参加状況は、約4割の高齢者が自主的なグループ活動に参加していない実態がある(高齢社会白書,2016)。この社会活動については、「地域活動」「社会的活動」「地縁的活動」としている先行研究もあり、現時点で統一された定義がない状況である。

国外の高齢者の社会活動に関する研究では、社会活動に参加することで心身機能・生活機能の維持や死亡率の低下につながっているという報告(Oman D, et al,1998;Musick MA, et al,1999;Luoh MC, et al,2002; Menec VH,2003)がある。国内では、地域在住高齢者や老人クラブ等の集う場に参加している高齢者を対象とした社会活動に関する研究がみられる。これらの研究では、性別・年齢や学歴等の基本的属性、運動機能等の身体的要因、主観的健康感やうつ傾向等の心理的要因、交流頻度等の環境要因が社会活動に関連していると報告されている(浜崎ら,2008;長田ら,2010;新田ら,2011;佐藤ら,2012;久保ら,2014)。これらから、高齢者の社会活動への参加に関する研究はあるものの、高齢者の社会活動の具体的な種類が外出頻度に影響している可能性については、いまだ明らかにされていない現状がある。

また、介護保険未認定の65歳以上の地域在住高齢者を対象とした移動能力が高いにもかかわらず、外出頻度が減少している閉じこもりの現状とその関連要因についての横断研究では、移動能力が高いが外出頻度が減少している高齢者は、おっくうな状態が閉じこもりに影響する可能性が示された(水口ら,2015)。このことから、「おっくう」と感じている高齢者の外出についての思いや考えを明らかにし、外出頻度だけではなく、具体的な社会活動の種類に参加状況について経年的に把握していくことが閉じこもりの予防的介入の手がかりになると考えた。

2. 研究の目的

介護保険未認定である75歳以上の地域住民を対象としたおっくうと感じている高齢者の閉じこもりに至る前の予防支援策を開発することである。

3. 研究の方法

(1) おっくうと感じている地域高齢者の外出への思いや考えについての質的研究

対象：北海道一地方都市在住75歳以上の住民のうち介護保険認定を受けていないが、おっくうと感じている住民とした。

方法：2018年2~3月、2019年2月に上記対象自治体・地域包括支援センターより紹介を受け、研究参加への同意が得られた住民に約70分の半構造化面接を実施した。

面接内容より逐語録を作成し、外出についての思いや考えの語りをコードとした。

外出についての思いと考えのコードを共通性や相違性について比較・分類し、抽象度を上げてサブカテゴリ・カテゴリを形成した。

本研究では、「外出」を買い物、散歩、通院等で家の外に出る行動(庭先やゴミ出しは含まない)とし、「思い」を物事から自然に感じられる心の状態・気持ち、「考え」を考えて得た内容・意思と定義した。

(2) おっくうと感じている地域高齢者の外出状況についてのベースライン調査

対象：北海道一地方都市在住の介護保険未認定かつ社会活動を行う75~84歳の住民1,000名とした。

方法：2019年10~12月、対象者へ調査票を配付し、郵送にて調査票を回収した。調査票は、属性、おっくうの自覚、外出頻度、外出の思いや考え、社会活動と活動頻度で構成した。おっくうの自覚は、基本チェックリストの「以前は楽にできていたことが今ではおっくうに感じられる」を用いた。社会活動は、橋本ら(1997)の仕事、社会的・学習的・個人的活動の4側面21項目を使用した。活動頻度は「ほぼ毎日」から「ない」までの8件法とした。

分析はSPSS Ver.26を用い、単純集計の後、おっくうの自覚の有無でおっくう群・非おっくう群の2群に分け、各項目について2検定(Fisherの直接確率検定)Mann-WhitneyのU検定を行った。有意水準は5%未満とした。

- (3) おっくうと感じている地域高齢者の外出状況の変化について1年後の追跡調査
対象：(2)の研究で1年後の研究にも協力を得られた北海道一地方都市在住の介護保険未認定かつ社会活動を行う75～84歳の住民310名とした。
方法：2020年10～12月、対象者へ郵送にて調査票を配付・回収を行った。調査票は、(2)と同様の内容（属性、おっくうの自覚、外出頻度、外出の思いや考え、社会活動と活動頻度）で構成した。
分析は、SPSS Ver.26を用い、単純集計の後、ベースライン調査からのおっくうの変化状況に応じて、おっくう継続群、おっくう移行群、おっくう改善群、非おっくう群の4群に分類し、各群の単純集計及び外出に関する項目の経年変化をWilcoxonの符号付き順位検定で実施した。有意水準は5%未満とした。

倫理的配慮：(1)～(3)の研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得て、実施した。

4. 研究成果

(1) おっくうと感じている地域高齢者の外出への思いや考えについての質的研究

研究参加者は10名、平均年齢 82.8 ± 4.4 歳だった。

おっくうと感じている地域高齢者の外出についての思いは、《楽しい》《おもしろい》《好きである》《うれしい》《体も心も気持ちがよい》《幸せである》《自由である》《便利がいい》《大儀ではない》の外出を促す思い(9カテゴリ)、《楽しくない》《おもしろくない》《大変である》《大儀である》《おっくうである》《行きたくない》《体がこわい》《めんどうである》《寂しい》《心配である》《聞きたくない》《疲れる》の外出を妨げる思い(12カテゴリ)が抽出された。また、外出についての考えは、《自分の足で歩く》《ぼけずに元気でいる》の身体面(2カテゴリ)、《外に出ることの大切さを感じている》《外への興味や好奇心がある》《気分転換を行う》《外出への抵抗感がある》の心理面(4カテゴリ)、《仲間がいて、誘いがある》《趣味を行う》《隣近所との交流を行う》《外出が自由にできる家族状況である》《子供や友人・隣近所に迷惑をかけない》《家族や友人の状況を優先する》の社会面(6カテゴリ)、《物理的に外出しやすい》の環境面(1カテゴリ)が挙げられた。

おっくうと感じている地域高齢者は外出を妨げる思いを持つ一方で、外出を促す思いも持っていた。また、外出についての考えとして、自分の意思で外出をしている一方、他者の状況を優先した外出や外出への抵抗感があることも明らかとなった。支援を行う際には、外出についての思いや考えを把握した上で、外出を促す思いや考えは支持し、外出を妨げる部分にはどのような背景があるのかを十分把握し、多様な側面から支援を行う必要があることが示唆された。

(2) おっくうと感じている地域高齢者の外出状況についてのベースライン調査

回収数559名(55.9%)のうち、性別、年齢、基本チェックリストのおっくう項目、外出に関する項目に欠損のない回答者469名(46.9%)を分析対象とした。性別は男性179名(38.2%)、女性290名(61.8%)、年齢は 78.6 ± 2.7 歳であった。

おっくうと感じている地域高齢者78名(16.6%)の外出頻度は、「毎日1回以上」39名(50%)、「2・3日に1回程度」31名(39.7%)、「1週間に1回程度」8名(10.3%)であり、非おっくう群との有意差はなかった。おっくう群は、外出について楽しくない、大儀である、おっくうである、体がだるい、体も心も気持ちがよくない、心配である、行きたくないという思いが非おっくう群に比べ有意に高かった。また、社会活動において、おっくう群では非おっくう群に比べ、お寺参りの頻度が有意に高く、国内旅行の頻度が有意に低かった。

おっくうと感じながら外出をしている地域高齢者は、国内旅行など好奇心や計画性が必要となる外出には消極的である一方で、精神的安寧を求めてお寺参りなど可能な範囲で外出している可能性が示唆された。今後は、外出状況を縦断的に把握し、閉じこもり予防の支援策を検討していく必要がある。

(3) おっくうと感じている地域高齢者の外出状況の変化について1年後の追跡調査

回収数247名(79.7%)のうち、要介護認定者、おっくうの自覚・外出に関する項目全てが未回答者であった者を除く、226名(72.9%)を分析対象とした。性別は男性94名(41.6%)、女性132名(58.4%)、年齢は 79.5 ± 2.8 歳であった。

おっくうの状況は、おっくう継続群19名(8.4%)、おっくう移行群23名(10.2%)、おっくう改善群12名(5.3%)、非おっくう群172名(76.1%)であった。各群において外出に関する項目に有意な変化が認められ、その内容は各々異なる様相となった。

これらの知見から、閉じこもり予防支援においては、外出の内容に特化した対象者の状況把握の必要性が示唆された。本研究では、比較的健康的な状態にある高齢者を対象とした閉じこもり予防・支援の一助になる結果が得られ、今後学会発表、論文投稿の予定である。

本研究は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、縦断的研究でのおっくうと感じている地域高齢者の外出の影響要因までを明らかにすることはできなかった。しかし、本研究の結果から、

新たな知見が得られた。それは、おっくうな状態を把握することは閉じこもりを早期に予防支援できる鍵になること、そして、社会活動の具体的な種類を把握していくことが閉じこもり予防支援においては必要であることが示された。

<引用文献>

橋本修二，青木利恵，玉腰暁子，柴崎智美，永井正規，川上憲人，五十里明，尾島俊之，大野良之：高齢者における社会活動状況の指標の開発，日本公衛誌，44(10)，760-768，1997.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 水口和香子, 藤井智子
2. 発表標題 おっくうと感じている地域高齢者の外出の現状
3. 学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水口和香子, 桑原ゆみ
2. 発表標題 おっくうと感じている地域高齢者の外出についての思いや考え
3. 学会等名 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------